演題番号：C8

上皮向性リンパ腫にロキベトマブを用いて長期管理した犬の一例

○河口祐一郎

ひまわり動物病院

1. はじめに：犬の皮膚型リンパ腫は病理組織学的に上皮向性と非上皮向性に分かれ、上皮向性は表皮、毛包上皮、腺上皮などの上皮付近にリンパ球増殖を認めるのが特徴である。臨床所見としては紅斑、鱗屑、脱毛、糜爛、痂疲を特徴とし、好発部位は体幹、四肢、頭部である。痒みはほとんどないものから非常に強いものまで症例により様々である。診断は皮膚病理検査にて行う。今回、上皮向性リンパ腫と診断されたミニチュアダックスフンドに瘙痒の改善を目的にロキベトマブ（サイトポイント®Zoetis）を投与したところ、掻痒と皮疹が明らかに改善し約２年間良好にQOLを維持できたのでその概要を報告する。

2. 材料および方法：症例はダックスフンドBW5.6 kg、13歳齢、避妊雌。主訴は「1週間前より左肩甲部に痂疲を認める」とのことであった。初診時所見は糜爛、痂疲を認め、皮膚細胞診を実施したところ球菌と変性好中球を認めた。膿皮症と診断しセファレキシン 25 mg/kgq12hを処方したが、第７病日に側腹部に新たな紅斑、表皮小環、糜爛を認めた。再度、皮膚細胞診を実施したところ、球菌、未変性好中球、脂肪細胞を貪食したマクロファージを認めたことから免疫介在性疾患を疑い、第12病日に皮膚生検を実施した。

3. 結　果：病理組織学的検査の結果は上皮向性リンパ腫であった。免疫組織化学染色の結果はCD3陽性、CD20陰性、GranzymeB陰性でＴ細胞由来であった。治療は第65病日に痂疲，糜爛，掻痒の再燃を認めたため掻痒の軽減を期待してロキベトマブ 10 mgを皮下投与したところ、掻痒だけでなく皮疹も軽減した。その後も糜爛や掻痒の悪化に合わせ随時投与量を第170病日 20 mg、第190病日 30 mg、第547病日 40 mg、第715病日 50 mgへ漸増し改善を認めた。良好に経過していたが第750病日に急性膵炎を認め第769病日に死亡した。

4. 考察および結語：皮膚型リンパ腫は予後不良で全身に糜爛が拡大しQOLが著しく低下することが一般的である。今回、掻痒や皮疹の悪化に合わせてロキベトマブを漸増して投与したところ掻痒だけでなく紅斑や糜爛も消失した。このことから上皮向性リンパ腫の特徴的な皮疹はIL-31により形成されるものと考えられた。ロキベトマブはIL-31を抑制することで紅斑や糜爛を防ぐことができるため、QOLの維持に大変有効と思われた。